

川連漆器の知名度向上を図るグラフィックデザイン

A2201619 中山 渚

研究の背景

秋田県湯沢市には800年の伝統を持つ川連漆器がある。昭和51年に国の伝統的工芸品、平成8年には秋田県伝統的工芸品に指定されている。昔から守り続けてきた手仕事の温もりと、美しい装飾技術は着実に現在へと引き継がれている。また、各工程の木地師、塗師、沈金師、蒔絵師が川連地区に集中していることから同じ産地内ですべての工程が完了する。そのため、生産性を高めることができる。しかし、800年という永きに渡る歴史や伝統を持つ川連漆器であるのにも関わらず、知名度が低いことが秋田県漆器工業協同組合の中でも問題となっている。これは川連漆器のイメージが確立されていないことや「川連(かわつら)」という漢字が読めないといったこと、川連漆器の魅力を全国に発信しきれていないことが原因として挙げられる。これらの問題を解決するため新たにロゴ・ポスター・パンフレットを提案し、多くの人々が川連漆器に関心が持てるようにする。そうすることで、川連漆器に対してのイメージが定着し、知名度向上へ繋がると考える。

研究の目的

本研究ではロゴ・ポスター・パンフレットの3つを提案する。ロゴには川連漆器の特徴である「花塗り」の要素と地名の意味などを込めてイメージの確立を目指す。ポスターでは、ロゴの要素を取り入れ漆器が出来上がっていく流れを見せるデザイン4点と、手仕事を守り続けられてきたことを伝えるデザイン4点の合計8点を制作する。パンフレットでは川連漆器の概要や特徴、各工程・職人などを取り上げ、川連漆器がどのように製作され守り続けられてきたのかを伝える。

研究のプロセス

●前期

川連漆器の歴史や現状調査、主な広告媒体と必要なツールの検討

●夏期休業中

秋田県漆器工業協同組合・各工房への取材(2回)

●後期

・ロゴの方向性を知るため湯沢市川連漆器伝統工芸館の職員と来館者へアンケート調査(2回)



[秋田県漆器工業協同組合での取材の様子]

A 案



B 案



C 案



・B案とC案を元にロゴ最終案の制作

・作品制作に必要な素材を集めに、湯沢市川連漆器伝統工芸館・各工房へ取材

・ポスターの制作(ロゴの要素を取り入れたポスター4点、職人の手仕事を取り上げたポスター4点の制作)

・パンフレットの制作(川連漆器の概要、特徴、各工程を掲載した蛇腹折りのパンフレットを制作)

成果物(完成作品)

- ロゴ … [制作数]1点



川連漆器

KAWATSURA JAPAN

川連漆器の特徴である「花塗り」という言葉からも連想ができるように、全体の形状は花を表現している。花びらは器と川連の「川」という文字を表しており、「川」を表した花びらが連なっているということから川連という意味が込められている。花びらが連なり花の輪ができることで地域の繋がりを表し、地域全体で作りに上げている漆器であることを示している。色は漆器らしさを表現するため、代表的な色として用いられる赤と黒、木地の茶色を用いた。

- ポスター … [制作数]8点 [サイズ]515×728mm

ロゴの要素を取り入れたポスターが4点と、職人の手仕事を取り上げたポスターが4点の合計8点を制作。ロゴの要素を取り入れたポスターでは、木地、塗り、沈金、蒔絵をそれぞれ1点ごとに取り上げ、4点で漆器が出来上がっていく流れを見せていく。また、1点を単独で見た場合にもそれぞれの工程が分かるデザインにしている。職人の手仕事を取り上げたポスターでは、各工程をそれぞれ1点ごとに取り上げ、昔から守り続けてきた手仕事の温もりを伝えていく。

- パンフレット … [制作数]1点 [折り方]蛇腹折り [展開サイズ]780×180mm



表面には川連漆器の概要、特徴を掲載し、パンフレットを読んだ人がすぐに川連漆器の要点を理解することができるように構成。裏面には各工程の説明を掲載し、木地師・塗師・沈金師・蒔絵師が作業している様子を取り上げた。こうすることで、蛇腹折りのパンフレットを広げたときに川連漆器の工程を通して見せることができ、川連漆器がどのように製作され守り続けられてきたのかが伝えられる。

考察

ロゴは川連漆器の特徴を捉えたデザインにし、他のツールにも展開できるようにした。そのため、ツールを全体で見たときに統一感が生まれ、より知名度向上に繋がられたのではないかと考える。反省点としては、作品に使用する素材集めに時間がかかってしまいスケジュールに遅れがでてしまったことが挙げられる。また、デザインをする際はクライアントの意見を尊重していくことが大切であり、一般の人にも良い印象を与えられるデザインを目指していくことが重要だということ学んだ。このことから、人を納得させるデザインに仕上げていくためには表現の幅が広くなければいけないということが分かった。